水辺の生命と暮らしのネットワーク――ラムサール・ネットワーク日本
ラムネットJニュースレター
Ramnet-J NEWSLETTER
Vol.54 2024年1月24日発行

NPO法人 ラムサール・ネットワーク日本
（略称：ラムネットJ）
〒110-0016
東京都台東区台東1−12−11 青木ビル3F
TEL/FAX 03-3834-6566
電子メール info@ramnet-j.org
ウェブサイト http://www.ramnet-j.org

コウノトリがやってきたことから はじまった地域の変化

認定NPO法人とくしまコウノトリ基金 森 紗綾香

徳島県鳴門市にコウノトリが飛来しはじめたのは、2013年のこと。飛来する個体が少しずつ増えるなかで1組のペアが誕生し、2017年には豊岡市周辺以外で初めて繁殖に成功しました。このペアは、それから7年連続でヒナを巣立たせており、その数は20羽になりました。飛来する個体も増えており、2023年1月から12月中旬までに、146個体が飛来しました。野外個体が372羽（2023年11月30日現在）であるので、およそ3羽に1羽がやってきたことになります。

なぜ、鳴門市にたくさんのコウノトリがやってくるようになったのでしょうか。コウノトリが餌にしているのは、カエルやフナ、ザリガニやジャンボタニシといった田んぼに暮らす生きものです。成鳥は1日に500g（ニホンアマガエルだと約100匹分）、成長期のヒナは1日に1kgも餌を食べると言われています。子育てをするには、その地域にたくさんの餌となる生きものがいることや、餌を捕りやすい環境であることが必要になります。徳島県はれんこんの作付面積が全国2位、そのなかでも鳴門市はれんこん栽培が盛んな地域で、れんこんや稲を育てる田んぼが広がっています。れんこんは、他の農産物に比べて農薬の使用量が少なく、収穫期の数週間以外は水を張っているため、餌になる生きものの種類も量も多いこと、水深が浅く粘土質で足が沈みにくいことから、この場所はコウノトリにとっていい餌場となりました。

しかし、夏が近づくとれんこんも稲も葉が生い茂り、コウノトリは田んぼの中に入れなくなってしまいます。夏でも餌に困らないように、耕作放棄地を再生してビオトープをつくり餌場として使えるようにしようと、2020年から取り組みをはじめました。20年〜40年も耕作放棄された田んぼは、草が生い茂り木も生えていました。人力と重機を使って草や木を刈り、トラクターで耕し、2カ月ほどで水を溜められるようになりました。魚道を設置したり、江（深み）を作ったり、産卵床でフナ等の卵を採取して入れたりと、生きものが増える工夫もしました。その結果、徐々に生きものが増えはじめ、コウノトリも休憩や餌を探しにやってきてくれるようになりました。

当初、突然やってきたコウノトリに、地域の方々は喜びと戸惑いがありました。飛来する個体数が増え、コウノトリがいることが日常になってくると、少しずつ地域が変わりはじめました。ビオトープづくりの取り組みは、地元農家と地元の酒蔵「本家松浦酒造」が連携した、「ビオトープ米でお酒をつくるプロジェクト」へと広がりました。そのお酒はコウノトリのお酒「朝と夕」と名付けられ、売り上げの一部は、当団体に寄付されコウノトリの棲みやすい環境づくりに役立てています。れんこん農家の中からも、特別栽培（農薬・化成肥料を慣行の5割減）でれんこんを生産し、「コウノトリれんこん」としてブランド化する取り組みがはじまりました。そのれんこんを使ったカレーや薬膳粥（やくぜんがゆ）といった商品も誕生しました。ビオトープの近くにある小学校では、コウノトリや地域について学ぶ環境学習がはじまりました。7回の授業のうち1回は、ビオトープで生きもの探しをします。田畑が広がる地域で暮らしている子どもたちでも、生きものを捕まえたことがないという子が多く、体験の機会になっています。コウノトリが選んでくれた自然豊かな地域の魅力を伝えるエコツアーも、カヌーやポタリングツアーを実施する事業者と連携してはじまりました。これらの商品も、売り上げの一部から当団体に寄付をいただく商品として販売しています。

当団体が中心となって進めてきたビオトープ整備でしたが、2023年11月からは、地元住民や農家で組織した団体が中心となり、ビオトープを整備する取り組みがはじまりました。コウノトリがやってきたことからはじまった地域の変化は、少しずつコウノトリも人も暮らしやすいまちづくりの輪として広がり続けています。

整備したビオトープで餌を探すコウノトリ

コウノトリのお酒「朝と夕」

コウノトリれんこん

吉野川河口を未来に引き継ぐために

とくしま自然観察の会／ラムネットJ理事　井口利枝子

吉野川河口に完成した２本の橋（阿波しらさぎ大橋と最河口高速道路橋）

シオマネキの稚ガニ

吉野川の河口の広さは日本一、わが国最大級の汽水域と河口干潟を有し、河口域の干潟は、シオマネキが多数生息し、渡り鳥の中継地となっています（「東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ」参加地）。河口域は、その地理的特性から、法的にも行政的にも複雑な状況にあり、河口には、20年以上の間に複数の大型工事（２本の道路橋、河口人工海浜など）が集中し、複合影響が懸念されています。

本会はラムネットJなどの協力を得て、複合的環境影響評価、ラムサール条約湿地としての国際基準を担保する環境保全措置、アセスメントや工事の影響評価法などの検討、保全措置の決定プロセスの公開などを要望してきました。その成果として、阿波しらさぎ大橋（河口１・８㎞）や最河口高速道路橋については、モニタリング調査が継続して実施され、20年間の調査データがウェブ公開されています。高速道路橋に関する総合評価については、今年１月中にパブコメが実施され、２０２４年今春で河口域のモニタリングが終了します。しかし、シギ・チドリ類など渡り鳥を含め、河口干潟生態系への影響をさらに見守り続けることが必要だと思います。

コロナ禍の中、本会では、20年以上継続してきた、干潟や海岸の観察会や環境学習、あるいは市民調査は控えてきました。２０１８年から昨年まで、河口干潟では、流木、ヨシ片、プラスチック類などの大量の漂着ゴミの堆積が頻繁にみられ、シオマネキなどの生息環境を守るために市民ボランティアによる清掃活動に専念してきました。昨年夏には人工改変や漂着ゴミあるいは砂の堆積による河口環境の変化を知るため、汽水域環境の健全度の指標であるシオマネキの生息調査を30年ぶりに実施しましたが、シオマネキの生息地や個体数が減っており心配しています。

吉野川河口の清掃活動に参加した市民ボランティアの皆さん

吉野川河口みらい講座のチラシ

フィールド活動を控えた期間、河口の多様な価値を多角的視点から再確認し、考え、未来に引き継ぐ方法を見出すために、ラムネットJとの共催でオンライン講座「吉野川河口みらい講座」をはじめました。これまで５回開催し、YouTubeで公開しています（下表参照）。この講座を通して、吉野川河口の生態系は、河口域から紀伊水道の漁場を支え、多くの生態系サービスを生み出す源であり、川と海をつなぐ河口域の役割や価値を多くの人々に伝えて保全していく大切さを再認識することができました。

多くの人々にとっては、生活の近代化によって今や吉野川河口は日常からすこし遠いものとなってしまったのかもしれません。しかし、その潜在的価値を考えると、今後の保全体制づくりが重要なのです。自治体をはじめさまざまな立場の人々の参加を得て、四国で初めてのラムサール条約湿地登録を実現し、河口域の価値を見守り、未来へとつなげていきたいのです。まだ間に合ううちに。

YouTubeで公開中の吉野川河口みらい講座	
第１回	底生生物からみた吉野川河口域の重要性 https://youtu.be/3Lr36qY1k8Y
第２回	渡り鳥にとって吉野川河口域はどんなところ？ https://youtu.be/z3fsxE1RWAI
第３回	吉野川で楽しむ！干潟の生き物ウォッチング https://youtu.be/s_Z4qSEI-N4
第４回	徳島のさかなと漁業 https://youtu.be/wLdIGwbtMn4
第５回	徳島の海、近年の大きな変化 https://youtu.be/zYx3xt1KNuA
とくしま自然観察の会　https://shiomaneki.net	

World Wetlands Day
2 February 2024

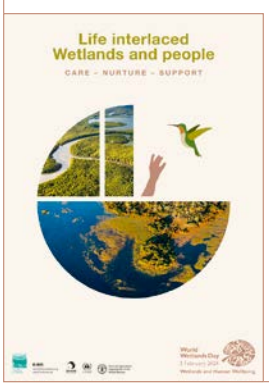
2月2日は「世界湿地の日」。人々の幸せな生活を支えている湿地を守ろう！

ラムサール条約は１９７１年２月２日に採択されました。それを記念して毎年２月２日は世界湿地の日（World Wetlands Day）と定められています。

今年の世界湿地の日のテーマは「Wetlands and Human Wellbeing」。湿地はさまざまな機能で私たち人間の幸せな生活を支えていて、世界の湿地を守っていくことが極めて重要であることを訴えています。

公式ウェブサイト（https://www.worldwetlandsday.org/）から、世界湿地の日をアピールするポスターやパンフレットをダウンロードできます。今年のハチドリの絵柄はカナダの先住民族のアーティスト、マイケル・ニコル・ヤグラナスさんが「ハチドリのひとしずく」という本で紹介した南米の物語をイメージしたものです。森の火事を消すために小さなくちばしで水を運ぶハチドリの話です。

同ウェブサイトではイベント情報や写真などを投稿することもできます。身近な湿地についてぜひ世界に発信してください。



世界湿地の日2024のポスター

湿地巡り

重富海岸（鹿児島県）

NPO法人くすの木自然館　浜本　麦（ばく）

「重富海岸」は、鹿児島県の中央に位置する鹿児島湾（通称：錦江湾）のふちにある海岸です。海岸内には松林が広がり、白砂青松の風景が広がります。干潮時には最大53haの干潟もあらわれ、ハクセンシオマネキやクルマエビなどの甲殻類、ムギワラムシやヤマトカワゴカイなどの多毛類、チワラスボやキス、ヒラメなどの魚類までさまざまな生き物が生息しています。一年を通してミサゴが飛び、冬にはクロツラヘラサギもやってきます。

私たちは、この海岸を拠点に環境教育を行っているNPO法人です。海や干潟だけでなく、森や川、湿地や里山などさまざまな環境のつながりから、人と自然の無理のない持続可能な共生社会を作るための活動をしています。

今でこそとても美しく、年間4万人以上が訪れる重富海岸ですが、40年前には埋め立て計画があり、20年前はゴミにあふれ人々から見放された海岸でした。見放され荒れていた頃も地元の方から聞こえるのは「昔はよかった」という声です。

では、なぜ「昔はよかった」と言える海岸が荒れるのでしょうか？　私たちはそれは、その場所の価値を知らず「あって当たり前」と思ってしまうからではないかと考えました。

20年前、私たちはこの海岸の価値を知り、残したい・守りたいと思える人を増やす活動を始めました。調査研究をし、そのデータを元に展示をつくり、使われていなかった海の家の建物を活用した博物館で発信し、さまざまなイベントで干潟や松林の価値を伝えました。ゴミだらけだった海岸では、毎日記録をとりながら拾い、ゴミを捨てたくないと思える対策をし、ゴミの落ちていない海岸を作りました。すると、多くの方が自ら一緒に保全活動をしてくれるようになったのです。「保全」が進むことで「利用」する人が増えました。2012年には国立公園の園地にも組み込まれています。

価値を知り、その場所を好きになる人が増えると場所は荒れません。これからも重富海岸は人も生き物も共生する海岸を維持していきます。

干潟の生き物観察ツアー

ハクセンシオマネキ

ムギワラムシ

第６回 生物の多様性を育む農業国際会議ICEBA2023

～報告とその背景～

NPO法人田んぼ／ラムネットＪ理事　舩橋玲二

第１分科会会場のトキ交流会館

田んぼは多様な生きものを育むことができ、日本の田んぼからは6000種以上の生きものが確認されています。しかし、農薬の使用や圃場（ほじょう）整備の進展など、生きものが棲みにくくなってきたことも否定できません。湿地を利用する田んぼは、多くの生きものに囲まれながらコメを生産し続けられるすばらしい環境です。生業としての農業と地域の自然環境を両立させること、その実現には何が必要かを議論する場としてICEBA（International Conference for Enhancing the Biodiversity in Agriculture）は始まりました。

第６回生物の多様性を育む農業国際会議ICEBA2023が2023年11月18～19日に開催されました。佐渡市のあいぽーと佐渡をメイン会場とし、3つの分科会は別々の会場に分かれて行われました。

筆者はトキ交流会館を会場にした第1分科会「生物の多様性を育む農業のすすめ」の副座長として参加しました。各地の事例紹介として、筆者は宮城県大崎耕土の認証米の取り組み、徳島県小松島市の茨木昭行さんからは地域ぐるみの生物多様性農業の取り組み、石川県羽咋市の農家である濱田栄治さんからは省エネや脱プラスチック等、環境負荷低減の取り組み、地元佐渡市の佐々木邦基さんからは子どもや保護者への食育や田んぼでの体験活動について報告がありました。

各地の熱を帯びた報告から、生きものを育む農業によって地域づくりを進めるためには、生きものの生息場所となるビオトープや移動経路となる魚道の設置で改善すること、機械化した現在の農業の中で生きものを育み環境負荷を減らすために工夫を重ねること、環境を守るための活動を支えるための認証制度や所得補償といった仕組みを整えること、農協や生協などが生きものを育んでいる農産物を消費者へ届けること、生きものを育む農業が食の安全・安心に直結し、持続的な地域づくりにつながっていることを食育や体験活動によってより多くの人に理解を拡げ、支援してもらうことなど、非常に多岐にわたる課題が再確認できました。

日本の農業は農業者の高齢化、後継者不足、生物多様性の低下に加え、気候変動対策として脱炭素やメタン発生抑制にも対応すべきとのことで、大きな変革が求められています。現在提案されている気候変動対策の中には、生きものを大きく減らしてしまうような手法も見られます。このようなトレードオフによって将来に禍根を残すことのないよう、今後、ICEBAの果たすべき役割は大きくなっているといえるでしょう。

ICEBA2023に関する情報は下記にもありますので、ぜひご活用ください。

●田んぼだより第５号　http://www.ramnet-j.org/2023/12/26/tambo2030_005.pdf

●ICEBA2023当日資料（佐渡市HP）https://www.city.sado.niigata.jp/soshiki/2018/55231.html

トキとコハクチョウ
トキがいるのは佐渡ならではの風景。当日は佐渡への船が一部欠航するほどの悪天候でした。

自然栽培圃場の看板
佐渡では生きものを育む農業への挑戦が続いています。

インフォメーション Information

●佐竹節夫さんがコウノトリの本を出版　日本コウノトリの会の代表でラムネットJの理事でもある佐竹節夫さんが執筆した本「コウノトリと暮らすまち」が、農山漁村文化協会から発行されました。豊岡市でのコウノトリ野生復帰までの経緯や、湿地の保全再生、無農薬・減農薬農業への取り組みなど現場の話が詳しく語られています。2200円。

●御嵩町リニア建設残土問題の続報　本誌52号・53号でもお伝えした、リニア中央新幹線建設残土によって岐阜県御嵩町の美佐野ハナノキ湿地群を埋め立てる計画について、御嵩町では審議会が設置され、その是非が検討されています。審議会には公募を含めた15人の委員が参加していて、その多くは埋め立て慎重派が占めています。昨年7月に新たに就任した渡辺幸伸町長も「埋め立てはゼロベースで検討する」と表明しているため、計画撤回に向けて一歩踏み出すかと期待が寄せられましたが、さまざまな問題があり、一朝一夕に「残土受け入れ撤回」とはならないようで、今後も目を離せません。この審議会の開催記録等は御嵩町のウェブサイトで公開されています。

なお、美佐野ハナノキ湿地群に関してはWWFジャパンも、昨年12月に保全を求める声明を発表しています。詳細はWWFジャパンのウェブサイトをご覧ください。

●佐賀で有明海再生シンポジウム　〝宝の海〟の再生を考える市民連絡会の主催によるシンポジウム「有明海の再生を科学的に考える～開門調査についての誤解を解き、誰もが納得できる解決策を探るために～」が、3月9日（土）13時から佐賀大学経済学部5番教室で開催されます。オンライン参加も可能。詳細は後日、同連絡会のウェブサイト（http://www.einap.org/jec/subcategory/projects/49）に掲載されます。

田んぼ2030プロジェクト ミニフォーラムの報告とご案内

ラムネットJが展開している「田んぼ2030プロジェクト」では、田んぼの生物多様性向上に向けたさまざまな取り組みを行っています。その一環として、2022年度からミニフォーラムを開催していますが、2023年中には2回のフォーラムをオンラインで実施しました。

9月22日に開催した第4回は「田んぼのOECM／自然共生サイトへの登録～その可能性と課題～」をテーマに、環境省自然環境計画課の蒲地紀幸さんと民間稲作研究所理事長の舘野廣幸さんを講師に議論が行われました。

12月15日の第5回では農研機構研究員の片山直樹さんを講師に迎えて、「生物多様性を向上させる農法～大規模調査の成果報告と、農業の現場での生物多様性の向上を考える」をテーマに開催しました。

第6回ミニフォーラムは、2月28日に不耕起栽培をテーマに開催する予定です。詳細はラムネットJのウェブサイトでお知らせします。

湿地のグリーンウェイブ2024 参加団体募集！

「グリーンウェイブ」は生物多様性条約事務局の呼びかけによって始まった、生物多様性を向上させるための国際的なキャンペーンです。この取り組みをあらゆる湿地で拡げるために、ラムネットJでは湿地保全のキャンペーン「湿地のグリーンウェイブ」を、5月22日の「国際生物多様性の日」を中心とした4～7月に開催しています。この期間に湿地の保全や賢明な利用を目的として各地で実施されるさまざまな活動や主催団体の情報を、湿地のグリーンウェイブに登録してください。

ラムネットJでは参加団体の情報を掲載したリーフレットを3月下旬に発行します。また、各団体のイベント情報はウェブサイトに随時掲載していきます。詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

●申込方法：「参加団体募集」のページ（http://www.ramnet-j.org/gw/boshu.html）をご参照のうえ、参加申込書をメールでお送りいただくか、ウェブのフォームからお申し込みください。
●リーフレット掲載のための登録締切：2024年2月29日（木）
●申込先・お問い合わせ：ラムネットJ事務局
担当者宛Eメール gw@ramnet-j.org
●詳しくは湿地のグリーンウェイブのウェブサイト（http://www.ramnet-j.org/gw/）をご覧ください。

WETLANDS GREEN WAVE

ラムサール・ネットワーク日本　会員募集!!

ラムサール・ネットワーク日本（ラムネットJ）の活動は、会員の皆様からの会費や、カンパ、助成金などでまかなっています。ぜひ、ラムネットJのサポーター（一般賛助会員）になって会の活動を支援してください。もっと積極的に湿地保護にかかわりたい方は、会の運営や活動を担う一般正会員としての入会をお待ちしています。そのほか、団体や企業としての入会も可能です。詳しくは事務局までお問い合わせください。

会員の特典

機関誌「ラムネットJニュースレター」を送付するほか、会員限定のメーリングリストに参加できます。ラムネットJが主催する催しの参加費が割引になる場合もあります。

入会申込方法

●郵便振替　郵便振替用紙（払込取扱票）の通信欄に、ご希望の会員種別、お名前、住所、電話番号、Eメールアドレスをご記入の上、年会費をお振り込みください。一般銀行から振り込む場合は（払込取扱票への記入ができませんので）振り込み後に上記の申込事項をEメール、FAX、郵便等で右記の事務局までお知らせください。

●ウェブサイト　一般賛助会員、一般正会員については、ウェブサイトからオンラインでの入会も可能です。http://www.ramnet-j.org/join/にアクセスし、「入会申込フォーム」に記入して送信してください。年会費は郵便振替でご送金いただくか、オンライン決済サイトSyncable（シンカブル）からクレジットカードで送金することも可能です。

振込先

ゆうちょ銀行　振替口座 00140-0-765702　ラムサール・ネットワーク日本
（一般銀行から）ゆうちょ銀行　〇一九（ゼロイチキュウ）店
当座預金 0765702　ラムサール　ネットワークニホン

会員種別と入会申込金（年会費）

会員種別	正会員	賛助会員
	総会での議決権があります	総会での議決権がありません
一　般	1口　5,000円	1口　2,000円
団　体	1口　10,000円	1口　10,000円
特　別	50,000円 以上	30,000円 以上
企　業	－	1口100,000円

年会費（入会金）

年会費は毎年4月から翌年3月までの1年分です。入会初年度は、年度途中の入会でも入会金として1年分の会費をいただきます。2～3月に入会の場合、初年度の年会費（入会金）は無料となり、4月からの次年度の年会費としていただきます。

事務局

NPO法人 ラムサール・ネットワーク日本
〒110-0016 東京都台東区台東1－12－11
青木ビル3F　TEL/FAX 03-3834-6566
Eメール info@ramnet-j.org